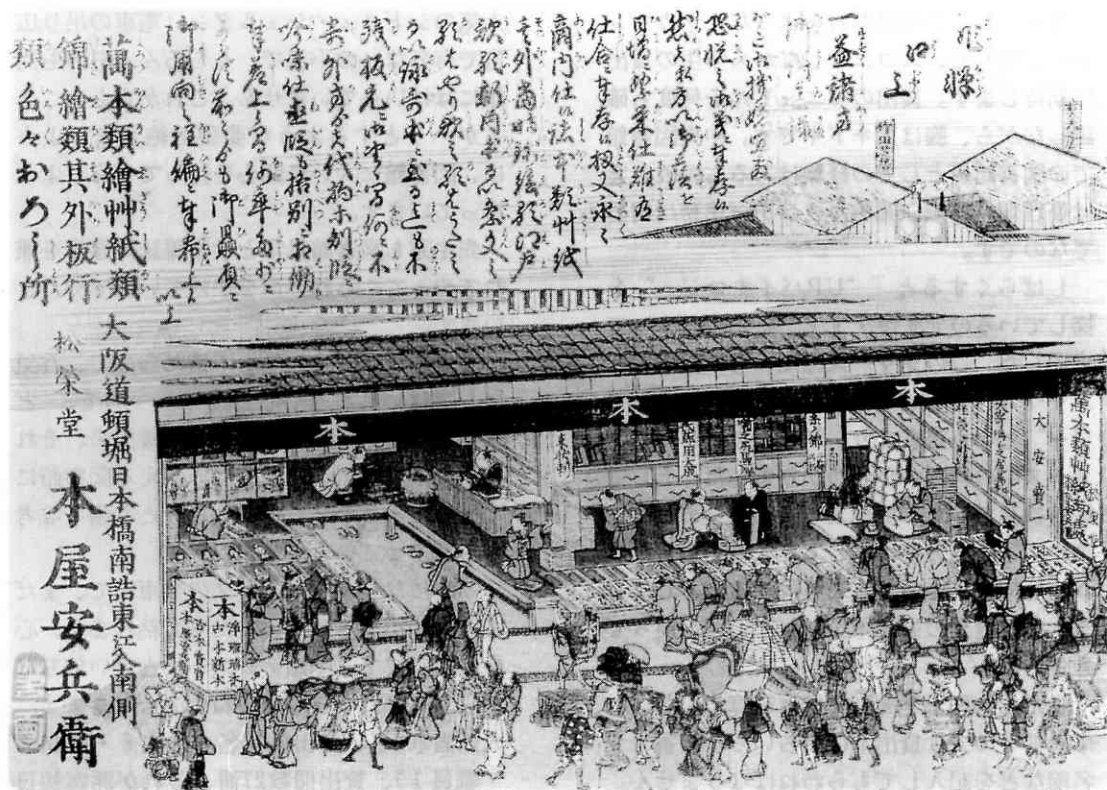


# 本屋安兵衛店頭図

教養部助教授 岸 文和

江戸時代にも、商品を宣伝したり新規の開店を広告するためのチラシがあった。「引札」と呼ばれる一枚摺の版画がそれで、さまざまな種類のもので出回っていたようだ。【図1】もそのひとつ。縦がおよそ26cm、横が37.5cmだから、ちょうど今で言うところのB4サイズ。しかも多色刷り。カラーでお見せできないのが残念なくらい、すばらしい出来映えのものである。広告主は「松栄堂 本屋安兵衛」。住所は「大阪道頓堀日本橋南詰東江入南側」。【図2】の地図を見れば分かるように、この付近にはたくさんの芝居小屋が立ち

並んでいたから、安兵衛の見世(★印)は大坂でも指折りの繁華なところにあったことになる。広告主もそのような地の利のことは十分に承知していたようで、引札の右上には、櫓をしつらえた「竹田芝居」と「若太夫芝居」をちゃんと描き込んで「芝居見物のおついでに、是非当店においで下さい」というメッセージを発信しているわけである。引札の刊行年代を推定しながら、しばらくの間、浪花のブック・ショップを覗き込んでみることにしよう。



【図1】 松栄堂本屋安兵衛店引札 関川享氏蔵



【図2】 大阪図（天保14年）『大阪市史』附図 昭和54年5月復刻 清文堂  
 左（西）から、大西芝居・中の芝居・角の芝居・若太夫芝居・竹田芝居

画面上部にあるのが宣伝文句。ちょっと長いのだが、ルビを現代かな遣いに改めて、これを読んでみることにしよう。

はばかりながらこうじよう  
 乍 禪口上  
 一 益 諸方御得意様がた、御機嫌宜敷恐  
 悦之御義に奉 存 候。然者、私方以御  
 蔭日増に繁栄 仕、難有仕合に奉 存 候。  
 扱又、永々商内 仕 候 諸本類、草紙、其  
 外當時錦絵類、江戸歌類、新内本るい、祭文  
 の類、はやり歌之類、はうた之るい、詠歌本  
 に至る迄も不残板元に御座候 間、何に不寄  
 外方より者代物等別段に吟味 仕、直段も格  
 別に相 働 奉 差 上 候 間、何卒多少によ  
 らず前々よりも御最眞に御用向之程 偏に  
 奉 希 上 候。 以上

安兵衛の商っていた商品は実に多様。宣伝文句の中には「本（本格的な学問書）」「草紙（浄瑠璃本・芝居本・絵本）」「錦絵（多色摺の版画）」「江戸歌（長歌・常盤津・清元・富本など江戸で生まれた浄瑠璃系の音曲）」「新

内（鶴賀新内に由来する浄瑠璃系の音曲）」「祭文（祝詞に起源をもつ歌謡の一種で浪花節の元祖）」「流行歌（潮来節・よしこの節・都々逸・大津絵節・追分節など）」「端唄（三味線を伴奏とする小歌曲・小唄）」「詠歌本（巡礼が歌う御詠歌のことか）」が挙げられているが、本屋安兵衛はそのような出版物全般の〈卸所〉。見世の右端に立てられた「萬本類草紙卸処」の板看板にもそのことは示されているわけだが、見世先には、仕入れた商品をどこかへ運搬するのだらう、たくさん荷物を背負った馬が見え、見世の右奥には、やはりかなりの数の商品を包装する手代たちの姿も見えて、これらはすべて〈卸売〉の記号と見ることができただろう。もっとも、安兵衛の見世では〈小売〉も行っているものであり、実際のところ、見世先に所狭しと陳べられた商品に群がっているのはごく普通の本好きであるように見える。

この見世の営業内容は、しかし、そのような〈卸売〉と〈小売〉にとどまるものではな

かったようだ。なぜなら、見世の左端に置かれた出し箱には「浄瑠璃本 古本新本」「古本売買 本屋安兵衛」と書いてあって、安兵衛は〈古書売買〉も行っていただし、また当時の「本屋」の多くがそうであったように「本類・絵草紙類・錦絵類」の〈出版〉にも手を染めていたはずだからである。ではいったい安兵衛はどのような出版活動を行っていたのか。江戸時代には、出版物にかかわる業者たちは本屋仲間を結成していたから、その仲間の〈出版許可〉の申請を記録した「書籍開版御願書控」(『享保以後大阪出版書籍目録』)や、〈版權〉の台帳である「板本総目録株帳」(『大坂本屋仲間記録』第十二巻、十三巻)といった記録を調べてみたが、残念ながら「本安」の名前は見当らない。かろうじて「絶版書目(売買差止・開板(免許))」に、本屋安兵衛の出版した洒落本『崎

陽英華』が「寛保二年五月、無届板行、板木本屋行事へ取上、<sup>のこらずうちわり</sup>不残打割、<sup>うれのこりほんほ</sup>売残 本反故摺悉く没収、<sup>こずり</sup>売買差留め」という記事があったが、この「本屋安兵衛」が引札を制作した本屋安兵衛と同じかどうか、はなはだ疑わしい。

本屋仲間の記録に名前が出て来ないのは、おそらく安兵衛が携わっていた出版物が〈出版許可〉を必要としない、したがって〈版權保護〉の対象とはならない「草紙」や「錦絵」そして「其外板行類」であったからにちがいない。引札に描かれた見世の中には、その手がかりになりそうな書名がいくつか見えるのだが、おそらく当時の〈売れ筋〉なのだろう、見世の奥に整然と重ねられた商品の前に吊り下げられた何枚かの紙の一番右端に「大寄噺シ之尻馬 中本」、それから左三つめに「噺之尻馬 六編マデ」と読める。『国書総目録』に当たってみると、『大寄噺之尻馬』は三篇三冊の「咄本(落語・軽口・笑い話の類)」。作者は桂文治・十返舎一九・立田土瓶の三人で、上方の浮世絵師長谷川貞信が挿絵を入れていて、天保年間(1830-44)に刊行されたとある。早速、京都大学附属図書館で実物を調べたところ、当のものは縦がおよそ22cm、横が15cmの中本。三冊にはすべて同じ奥付があり、案の定、「万草紙物おろし処 大坂道とんぼり 本屋喜助板 同道とんぼり日本橋南詰半丁東 本屋安兵衛」と記されていた。したがって、たしかに安兵衛は〈版元〉として出版業を営んでいたことが分かったわけだが、この咄本の類はそもそも〈出版許可〉の要らない、したがって仲間内での〈版權保護〉の対象とはならないもの。本屋仲間の記録にこの出版物のことが載っていないのも、また当然のことなのである。

ところで『大寄噺之尻馬』を調べているうちに、この咄本にじつはもう一種、かなり小型(縦がおよそ16cm、横が11cm)のものがあることが分かった。これには【図3】に示した奥付があって、〈版元〉は「大阪心斎橋筋



【図3】 『大寄噺之尻馬』小本奥付  
大阪府立中之島図書館蔵

順慶町南入 秋田屋幸助 同道頓堀日本橋南  
詰東江入 本屋安兵衛「月亭生瀨戯作・友  
鳴松旭書画」で、次のような宣伝文が書かれ  
ている。

「式篇三篇四篇おいおいひきつづ追々おおほん引統もつていて出版致し御  
座候。前篇三冊は大本にて売出し有之候へ  
共、此度新作を以あい改め小形本に仕立出版  
仕候。右御望みの方様一冊づつ綴分本御座候  
間、何方の本屋はんこやへも売出有之候。小  
形おどけの本安板ほんやすばんと被仰おお下せくだされ、御手寄の本屋  
にて御求め被遊可被下候あそばされくださるべくせうろう」

この小型本は、天保年間に刊行された三冊  
の「大本（中本?）」の続編で、刊行年代は  
『京都大学頼原文庫目録』によれば嘉永七年  
（1854）頃。しかも東北大学狩野文庫には、  
この小型本が五冊（合綴本）所蔵されている  
ことになっているから、実物を見ないことには  
何とも言えないが、嘉永七年以後、これら  
小型本の『大寄噺之尻馬』が少なくとも五  
冊、続編として刊行された可能性がきわめて  
高い。したがって、店内に見える「噺之尻  
馬」と書かれた二枚の紙のうち、「大寄噺シ  
之尻馬 中本」というのが天保年間に刊行さ  
れた正編三冊のことを指し、「噺之尻馬 六  
編マデ」というのが、おそらく嘉永七年以後  
に続編として刊行された小型本のことを指す  
にちがいない。

ところで、この小型本の奥付に記された宣  
伝文に、ちょっと気になる語句がある。「は  
んこや」というのがそれ。これは「板行屋」  
あるいは「版行屋」あるいは「版古屋」の変  
化した語なのだが、本屋仲間のうちでは、ど  
うやら本格的な本類を扱う「本屋」と、それ  
以外の板行（出版）物、つまり「浄瑠璃本  
（正本・道行本・抜本）」や「端歌本」、「芝  
居絵」やいわゆる「一枚摺」を扱うグループ  
に分かれていたようなのだ。本屋仲間の役員  
たちの寄り合い記録である「出勤帳」（『大  
坂本屋仲間記録』第一巻～七巻）や、仲間内  
の紛議の経過などを記した「裁配帳」（同  
前、第九巻）などで「草紙屋（双紙屋）」と

記されているのがおそらくこれで、文久元年  
（1861）ころには「本屋仲間之内草紙屋組」  
として本屋清七・天満屋喜兵衛・綿屋喜兵衛  
など五軒の名前が挙げられている。この草紙  
屋のことはあまりよく分かっていないので、  
念のため小学館『国語大辞典』で「はんこ  
や」を引いてみたところ、ちょっとおもしろ  
い記事に出くわした。「はんこや、阿波文、  
婦源、本安」というのがそれで、この「本  
安」こそ問題の本屋安兵衛のことに違いない  
のである。「阿波文」は「寿桜堂、菊屋町心斎  
橋通三津寺筋北入」の阿波屋文蔵のことで、「婦  
源」はおそらく麩屋源右衛門のことで、どう  
やら本屋安兵衛は、「本屋」という屋号であ  
るにもかかわらず、どちらかと言えばく柔ら  
かいものゝを出版する「はんこや」として有  
名であったことになる。もっとも、それが何  
時のことであったのか、じつはこの文章の出  
典である『浪花名家名芸三幅対集』というの  
がいつの時代のどのような史料なのか皆目分  
からず、残念ながらその時代を特定するこ  
とはできなかった。

本屋安兵衛は本屋というより草紙屋である  
ことが分かったわけだが、店内で宣伝されて  
いる出版物がすべて安兵衛のものだというわ  
けではなさそうだ。例えば、右から二番目の  
「怪談」という書名。その下の右側には「竹  
本長登太夫」と書いてあるのがかるうじて読  
め、これを手がかりにすると、この「怪談」  
はどうか『神霊怪談はなのくもまくらのあけぼの花雲佐倉曙』のこ  
と。嘉永五年（1852）三月に、義民・佐倉宗  
五郎を主人公とする歌舞伎「花雲佐倉曙」が  
安兵衛の見世のすぐ近くにある「角の芝居」  
で上演され、同年九月には、引札に描き込ま  
れた「竹田芝居」で、今度は佐久間松長軒  
（竹本長登太夫）と登与島玉和軒合作による  
浄瑠璃（人形劇）として上演された。安兵衛  
の見世で売られているのは、その浄瑠璃の詞  
章に節付けしたいいわゆる「正本（丸本）」、嘉  
永六年（1853）九月に刊行された七行口絵入  
り（長谷川貞信画）のものだろう。そして  
「怪談」の左隣に見える「糸乃錦 三篇出

同 音羽山	同 増補	同 若草山	同 再板 増補 新増	琴 曲 糸 錦	古 今 端 歌 大 全	同 萩 錦	歌 曲 百 千 鳥
和 魂 河 直	和 魂 河 直	和 魂 河 直	和 魂 河 直	和 魂 河 直	和 魂 河 直	和 魂 河 直	和 魂 河 直

【図4】「板木総目録株帳（文化九年改正）・琴曲部」  
大阪府立中之島図書館編『大坂本屋仲間記録第十三巻』清文堂

板」はおそらく『琴曲糸の錦』のこと。安永八年（1779）に田原屋平兵衛が出版して以来版を重ねたようで、【図4】の「板木総目録株帳（文化九年改正）・琴曲」の部には、『琴曲糸之錦』と『同再板 増補・新增・新增補』が「塩平（塩屋平助）」について「河直（河内屋直助か）」「河喜（河内屋喜兵衛）」の名前で登録されており、結構人気のあった出版物であったことが分かる。もっとも「琴曲」というのは、単に「琴で演奏する曲」という意味ではなかったようだ。なぜなら「裁配帳」には、文化二年（1805）に塩屋平助が『糸の錦』の「増補発行申出」を行ったところ、田原屋平兵衛との間で版權を巡るトラブルが発生したことが記されており、その項目の最初に「端歌一件」とあるからである。

「□代節用大成」と「□来状刺」もどうやら安兵衛の出版物ではなさそうだ。「代節用大成」は、おそらく『永代節用大成』か『万代節用大成』のこと。これは通俗的な国語辞典のことで、江戸時代にはさまざまなものが出版されていたわけだが、『国書総目録』には『永代節用集』（別名『早引永代節用集大全』、天保十四年刊）や『万代節用集』（別

名『万代早引節用集大成』、嘉永三年刊）の名は見えているが、残念ながらぴったりと一致するものはない。「□来状刺」についても事情は同じで、これはおそらく『往来状刺』を書名の一部とする往来物。「往来物」というのは初等教育用の教科書の類のことで、「状刺」とあるから、多分、手紙の模範文例集のようなものだろう。

結局のところ、安兵衛の見世先で宣伝されている〈売れ筋〉の出版物五点のうち、確実に安兵衛自身が出版したと考えられるものはただ一点。このことから、安兵衛の見世は、自社出版に力を入れる〈版元〉というよりは、他の版元の出版物を販売する〈取次店〉であったことが分かるわけだが、なにしろ安兵衛の見世は有名な「はんこや」。板行屋の主要な業務に錦絵類の出版・販売があったはずで、はたしてこの方面の事情はどうなっていたのだろうか。上方では錦絵類の〈出版許可〉が不要。江戸では「極印」という検閲制度があったのだが、大阪でそれがなかったということは、どうやら上方では、一枚摺の浮世絵そのものに文化・風俗を生産・刺激する



【図5】 長谷川宗広「仮名手本忠臣蔵」  
安政四年四月 角の芝居 池田文庫蔵



【図6】 五粽亭広貞画「夏祭浪花鑑」 嘉永三年五月中の芝居 池田文庫蔵

だけの力がなかったということのようなのだが、これはまた、上方浮世絵には役者絵と風景画はあるが美人画がそれほど多くないことと関係があるかもしれない。そう言えば安兵衛の見世の錦絵の売り場は、全体のおよそ三分の一くらいの面積を占めているわけだが、そこで売られているのは役者絵のみ。この引札が制作された時期を、『神霊怪談花雲佐倉曙』の正本が出版された嘉永六年（1853）九月以降、およそ安政年間（1854-60）と考えると、この頃は、長谷川貞信をはじめ一養亭芳滝・五粽亭広貞・歌川国員・長谷川宗広（【図5】）たちが活躍していた時期。この時期の役者絵は、天保改革の余波だろうか、きわめて小さな「中判（約26.0cm×19.5cm）」が主流で、そう言えば、安兵衛の見世先に並べられている役者大首絵と、店内に置かれた本類とを比較してみると、それほど大きさの違いがないように見える。ところで、錦絵コーナーの奥に見える四点の錦絵は、きわめて「上方的」だと言えそう。というのも、「続絵」の場合には、江戸絵が一枚・三枚・五枚と奇数単位で続いていくのと対照的に、上方では二枚・四枚というように偶数単位で続いていくことが特徴のひとつであったからである。もちろん上方浮世絵に三枚続きがな

いわけではないが、安兵衛の見世で売られているのは明らかに二枚続き（例えば【図6】）が二組のようである。

安兵衛の見世先で売られているのがすべて役者絵であるということは、しかし、ちょっと不審なところがないわけではない。というのも、この時期の大坂では、いわゆる「上方風景版画」が制作されていたはず。長谷川貞信をはじめとする多くの絵師たちが、江戸の歌川広重に触発されて、この種の作品をたくさん制作したのだが、それが一点も見当らない。もっとも、安兵衛の見世は道頓堀の芝居街のすぐ近く。役者絵が多いのもまた当然のこと。そう言えば、見世の三分二を占める草紙類の陳列台に見えるのは、大部分がおそらく浄瑠璃本だろう。当時は素人浄瑠璃が大流行。本屋安兵衛は、芝居街すぐ近くという〈地の利〉を生かして、歌舞伎や浄瑠璃に力を入れていたというわけだ。おおぜいの〈本好き〉〈芝居好き〉が集まる幕末、浪花のブック・ショップ。この引札からは、その繁盛ぶりが伝わって来るようだ。